親鸞における「疑」の問題

大松 龍昭

『信はたれたがひなたころなり』である如く、親鸞においてこの「疑」なるものは、信心を顕出す上において、否定的に密接に関わるものとして捉えられている。故にこの「疑」の問題は、従来の真宗教において厳しく扱われてきた問題の一つと言えるであろう。しかし、特に「無明」との関係について、及び「疑無雑」についての解釈などを見るに、この「疑」なる問題は、いまだ幾つかの曖昧さを残しているようにも思われるを得ない。よってこの点について、諸説を参考にしながら考察せんとするのが拙論の目的である。まず仏教一般において「疑」とは、基本的には四諦、三宝に対して、不決定、猶予する様相を意味し、そしてそれは「無明」と解され、これとは別に、真宗のみに談せられる「別途」なるものが立てられ、これを「疑無明」と称し、そしてそれは「本願疑惑」を意味するものと定義づけられている。真宗においては、このような「無明」の理解は「通途」（無明）と解され、これとは別に、真宗のみに談せられる「別途」なるものが立てられ、これを「疑無明」と称し、そしてそれは「本願疑惑」を意味するものと定義づけられている。

印度学仏教学研究第四十三巻第二号 平成七年三月

4-545
親鸞における「疑」の問題（大松）

「疑」とは、やはり「通途」の無明理解から独立した意味をもったものとも考え得るのだが、しかしこのことは、また親鸞が表す「疑蓋無隠」の問題を問わずに、まだ充分ではない。

親鸞はこの「疑蓋無隠」という表現を、「信巻」の三一問に答において繰返し（九例）使用しているのだが、ここで問題にしたいのは、この「疑蓋無隠」の「疑蓋」の意味についてである。この「疑蓋」を五蓋の中の疑蓋、即ち煩悩と解釈する先哲もいるが、しかし、前述の通り宗学では、「疑」と本願疑惑の心と捉えるのである。

しかししながら、この「疑蓋」を、単に本願疑惑の心、自力心とのみ理解し得るであろうか。と言うのは、まず親鸞は、「疑蓋」に、「ホームノフ」という左訓を施しているのである。ただ、この左訓は、この至心にしかえないもの故に、それはあくまでも「至徳の尊号」たる如来の「至心」の為、どこまでも清浄なることを作示しているものであると解釈することも可能である。しかしながら、この「疑蓋」に通じる疑の類語として「疑」を示しているものであると解釈することも可能である。
の間違いによらざるが故に、疑問に繫ぐさるるにによるが故に、
に、」また、「もまして、このたび疑問に繫ぐさられれば、
かえってまた嘆労を経歴せん」などと示されている。この
繫ぐさは、「大絵」の「魔網を壊裂し、諸の繫ぐさ解くに
するのもだろう、その「繫ぐさ」とは煩悩の異名で、心にまと
わりついて善を修めるのを妨げるもので、雑かくは十に分け
られてこれを十繫ぐさと言う。また「どうもこの「繫ぐさ」は、先の十
繫ぐさ中の一つに含まれており、その故に「貧愛饗箇の雲霧、常に
真実信心の天に覆へり」のように、「貧愛饗箇」なる煩悩の
働きとして表現されているのであろう。それでもまた、ここに
繫ぐさの意味、否、親鸞における「疑」の意味するものとは、極めて
煩悩に近い意味を持つものとして捉えられていると考えら
れるのではなかろうか。然るにこのような理解が、親鸞に
おける「疑」及び「無明」を理解する上で懐疑だきたすか
と言うと、それではなくて、そのことは、特に親鸞の二種深
親鸞における「疑」の問題（大松）

（キーワード）
無疑、無明、疑蓋

（龍谷大学大学院）

（訳稿）

— 547 —